



Title	青年の将来展望に関する研究
Author(s)	尾崎, 仁美
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41292
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 お 尾 さき ひと み

博士の専攻分野の名称 博 士（人間科学）

学 位 記 番 号 第 1 4 3 3 4 号

学 位 授 与 年 月 日 平成11年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当
人間科学研究科教育学専攻

学 位 論 文 名 青年の将来展望に関する研究

論 文 審 査 委 員 (主査)
教 授 三木 善彦

(副査)
教 授 倉光 修 助教授 榎本 博明

論 文 内 容 の 要 旨

青年が将来に目を向け、自分なりの展望を確立することは、青年期の重要な課題とされてきた。青年を対象とした実証的研究において、時間的展望や人生設計、ライフスタイルや人生観などの研究が数多くみられていることから、将来展望は青年期における中心的テーマの一つだといえよう。しかし近年、時間指向性をめぐって青年の多様なあり方が指摘されている。未来指向的な青年が多数を占めると指摘される一方で、刹那主義的な青年が増加しているという指摘もみられる。また、未来指向的なあり方が最も適応的だと指摘される一方で、現在を重視し、現在を楽しみながら生きるというあり方のポジティブな側面も強調されている。

将来展望を扱った従来の研究は、青年全体としてどういう展望の特徴がみられるか、あるいは男性と女性にどのような違いがみられるかといったことに主な焦点があてられてきた。しかし、青年の内面世界は多様であり、同じ青年とはいえ、調査者がとらえようとする将来展望の側面が全ての者に重要な意味をもつとは限らない。時間指向性の多様性を考慮するならば、人生の目標や将来の見通しなど、将来展望を持つことがそれほど重要な意味を持たない青年もいるであろう。したがって、青年期における将来展望の問題を詳細に検討していくには、将来展望の広がりや内容のみを問題にするのではなく、将来展望を持つことが個人にとってどの程度重要であるかを考慮する必要がある。

本論文では、そのことを実証する目的で、

- (1)個人における将来展望の重要性をとらえる指標を検討し、
- (2)その指標を用いて、将来展望が重要な群とそれほど重要でない群とで、現在の適応感や時間的展望、将来の見通しにどのような相違がみられるのかを検討した。

第1章から第3章では、青年の将来展望に関する従来の理論および実証的研究を概観し、本研究の目的を提示した。第1章では、青年期に関する従来の理論をもとに、青年期の将来展望をめぐる問題について、環境の変化、認知能力の発達、内面世界の変化という3側面から考察した。第2章では、青年の将来展望に関する従来の実証的研究を概観した。それらは大きく分けて、どの程度展望が広がっているか、どの程度将来を肯定的にとらえているかという将来展望の量的側面に関する研究と、どのような展望を描いているか、どのような生き方を望んでいるかという将来展望の質的側面に関する研究とに分けられる。量的側面については、認知的側面（将来展望がどれだけ広がっているか）と情緒的側面（将来に対して肯定的か否定的か）に関する研究を取り上げ、質的側面については、外在的視点（調査者があらかじめ項目を設定し、被験者に選択させる方法）による研究と内在的視点（被験者に自由に表出させる方法）

による研究を取り上げた。第3章では、従来の研究にみられる問題点を検討し、本研究における調査の目的を提示した。

第4章から第6章では、個人における将来展望の重要性をとらえる指標について検討した。第4章（調査1，2）では、「将来展望への関心」を指標として、「普段から将来の生き方について考える程度」を尋ね、将来展望の内容にどのような相違がみられるかを検討した。中学生の場合は、将来の生き方について考える者とそうでない者との間に将来展望の内容や実現希望の程度に違いが見られたのに対し、大学生の場合は、「普段将来の生き方について考えない」と答えた者はほとんどみられず、将来の生き方を考える者とそうでない者との間に将来展望の内容や実現希望の程度に違いはみられなかった。このことから、この指標では個人にとっての重要性が十分にとらえられないと判断された。

第5章（調査3）では、「将来展望への探求」を指標として、「人生の意味・目的を探求している程度」を尋ね、人生の意味・目的の獲得と適応との関係にどのような相違がみられるかを検討した。その結果、人生に意味や目的を獲得できていない群については「将来展望への探求」が有効な指標となったが、獲得できている群についてはその指標は有効ではなかった。第6章では、これらの方法の問題点について検討した。その結果、これまでの方法はすべて、「将来の生き方」「人生」など調査者が設定した側面に対する関わりを指標として、個人における重要性をとらえようとしてきたことがわかった。しかし、個人にとっての重要性を把握するためには、調査者の視点から個人をとらえるのではなく、被験者個人の視点に立つ必要があろう。そこで、調査4では、友人関係や学校、容姿など、個人がどのようなことを重視しているかをまずとらえ、その中に将来の仕事や達成したい目標など、将来展望の側面が含まれるかというアプローチをとった。この観点から個人にとっての重要性をとらえた結果、将来展望が重要な群では人生の目的が獲得できていれば適応的、できていなければ不適応感が高く、将来展望が重要でない群ではそのような相関が見られなかった。これらの結果、調査対象の個人個人がどのようなことを重視しているかをとらえ、その中に将来展望に関した内容が含まれているかどうかを指標とすることの有効性が検証された。

第7章（調査5）では、調査4で検討された指標を用い、個人にとって将来展望をもつことが重要な群とそうでない群とで、将来展望にどのような相違がみられるかを検討した。将来の見通しのある群とない群それぞれについて、それらが重要な意味をもつ群とそれほど重要な意味をもたない群に分類し、各群の違いを(1)人生や生活における満足度、(2)時間的展望、(3)将来のイメージ、(4)将来の見通しといった観点から比較検討した。将来の見通しのあることが個人にとって重要である群は、他の群と比較して、生活や人生に対する満足度も高く、過去・現在・将来いずれにおいても最もポジティブなタイプであった。さらに、見通しそのものについても、ほとんどの者がその実現を非常に強く希望しており、実現する可能性や見通しに対する実行の程度も他の群と比較して高いことが示された。また、同じように将来の見通しがあっても、それが個人にとってそれほど重要でない群では、生活や人生への満足度はそれほど高くなく、将来に対するイメージもあまりポジティブなものではなかった。一方、将来の見通しがない場合、それが個人にとって重要である群と比較して、個人にとってそれほど重要でない群では、将来の見通しそのものをそれほど積極的に求めている者が多くみられた。また、将来の見通しを持たずそのことが重要でない群は、人生の満足度もそれほど低くなく、過去・現在・未来に対してもそれほどネガティブではないことが示された。このように、見通しの有無がその個人にとってどのような意味を持つかによって、現在の満足感や将来への希望の程度、さらには見通しそのものへの取り組み方が異なってくることが示された。

最後に、第8章では、本研究で実施された5つの調査結果をまとめ、今後の課題を検討した。将来展望に関する従来の研究では、将来をどのようにとらえているか（ポジティブかネガティブか）や、どのような見通しをもっているかについて、調査対象全体を一つのサンプルとして、あるいは、性や年齢などの要因によって調査対象を群別していた。それに対し、本研究では個人の視点に立って将来展望の意味づけを考慮した点に大きな意義がある。今後の課題としては、将来展望の質的側面について詳細に検討すること、また、生涯発達の観点から縦断的な研究を行う必要性を指摘した。

論文審査の結果の要旨

青年期の発達課題は将来の社会生活（職業や結婚）に向けて準備を進めることであり、そのため青年は人生設計を建て、ライフスタイルや人生観などを模索し、自分なりの将来展望を確立しなければならない。青年の将来展望に関する従来の研究では、展望の広がりや明るさ、あるいは将来設計や人生観の内容について、青年全体の特徴や男女差に主な焦点が当てられていた。しかし、青年の将来への意味づけは多様であり、将来展望を持つことがすべての青年にとって重要な意味をもつとは限らない。

そこで、本研究では個人の視点から将来展望の重要性を考慮し、(1)個人における将来展望の重要性をとらえる指標を検討し、(2)その指標を用いて、将来展望が重要な群とそれほど重要でない群とで、適応感や時間的展望、将来の見通しにどのような相違がみられるかを検討した。

その結果、同じような将来の見通しを持っている場合、あるいは見通しが持てない場合であっても、それが個人にとってどのような意味をもつかによって、現在の適応感や将来への希望の程度、および見通しそのものへの取り組み方が異なってくることが示され、青年の将来展望を検討する上で、それが個人にとってどれだけ重要であるかを考慮する必要性が実証された。

本審査委員会は本論文を青年期の将来展望に関するすぐれた論文として評価し、博士（人間科学）の授与に値するものであると判断するものである。尾崎さんがこの研究を発展させ、青年期の心理学的研究に寄与することを期待したい。